

# マックス・ウェーバーの宗教理論

稻岡順雄

## はじめに

傳統的權威の崩壊、主體性の喪失、そして人間性の分裂、現代はこのような時代である。いかえれば現代はわれわれ人間の内面に激突する多くの困難な問題をもっている。その反面人々は生命のよりどころとなるべき何ものかを熱烈に求めているものだといえる。

これから述べようとするマックス・ウェーバー (Max Weber) はあくまで良心的知性的にこのような問題と格闘した學者であるといふことができる。格調の高い學問的な彼の業績も他面ではこのような人間の努力によつて強くいゝるどられていると考えられる。若しわれわれが現代に生きる人間として知性的科學的にこの緊張した時代に處して生きていき度いと思ふならばいいかえれば現代人としていきながらしかも内面の人間性の要求としがない此世の營みとの矛盾をいいかげんにごまかさずに生きていき度いという要求、即ち、世間態と體裁以外に眞の生き甲斐をもとめる要求が充されるかも知れないと考えて敢えてマックス・ウェーバーをあらためて顧みようとするものである。

尙彼は後述するごとく、キリスト教を主として世界の諸宗教とくにアジアの諸宗教について言及しているのでこの小論ではこの問題に焦點をあてることによつて、現代の我が國の混亂した文化ことにわが國の文化の盲點になつてい

る宗教の問題を解決する手がかりを得るかも知れないという意圖をもつて筆をすすめていき度い。

## 第一章 マックス・ウェーバーの生涯と著作

マックス・ウェーバー (Max Weber) は一八六四年四月二十一日ドイツ中部エルベ支流河畔の都市エルフルトに生れ、一九二〇年六月十四日に逝いた。父マックス・ウェーバー (Max Weber 1835-1897) は、自由主義政黨である國民自由黨代議士であり、母ヘレーネ (Helene 1844-1919) は熱心なクリスチャンであつた。彼はこの二人の間に七人兄弟姉妹の長男として生れ、家はかなり裕福であつた。

幼年時代の彼はどこか神經質で蒲柳な體質をもつた少年であつたらしく、彼が生れたとき、頭が異常に大きく、しかも母、ヘレーネは産褥熱にかかつたので乳兒の彼は、社會民主黨の指物師の妻であつた他の母の腕に人生最初の第一歩をゆだねた。

彼は、驚くほどひとりよく遊びその早熟は人々をおどろかした。例えば、二歳半で積木で停車場や汽車をこしらえたといわれ、四歳のとき母につれられて、ベルギーに旅行し、汽車の轉覆事故をみて、人の世の無常を感じたということがある。ところが、おなじ四歳のときはからずも腦膜炎を患い一年ほど癎攣と鬱血のくせがつき、白痴になるか、死ぬかという生命の危険が彼を脅かした。しかもこの病氣の間に自分の體を四肢がささえかねる程頭が肥大しこれは漸次回復して行つたが、神經質的な苦惱は彼の一生の重荷となつた。

この間父マックスはエルフルトのついでベルリンの市參事會員として、保守的、自由主義の立場をとる政治家として、母ヘレーネは深い宗教的心情と強い意志をもつ美しい聰明な婦人として、社交的にその地位をみとめられていたが、父の社交的世俗的な性格と母の内省的宗教的な性格は露骨な鬭争にまではいたらなかつたが次第に家庭に微妙な

空氣をかもしつつあつた。後年マックス・ウエーバーが、ハイデルベルグ大學に在職中、兩親の間の感情的喰い違ひがもとで父と不和となつたのも、根本的には、父の社交的外面的な性格と母の宗教的內面的な性格の葛藤が原因であつたと考えられる。なおそののみでなく、兩親のこの性格の喰いちがいは、マックス・ウエーバー自身の内面性のうちにまで持ち込まれ後年の精神における、國民的權力國家の社會倫理とキリスト教的人格倫理との間の相剋の萌芽は、ここに運命的に生れていたともいえる。

また彼が生れ死ぬるまでの期間は、祖國ドイツも極めて、數奇な運命をたどつていた時代である。即ち彼は有名なビスマルク時代に成人しヴィルヘルム二世時代に社會的に活躍したのであり、晩年はドイツ帝國滅亡という悲運に遭遇したのである。しかしいずれにしてもドイツ帝國は表面上は華やかな興隆を示していたが、その裏面ではマックス・ウエーバーが洞察し危懼したようにその畸形的な社會・政治構造のために歩一步と悲劇的經路をたどつていた。即ち、第一次大戰の敗北と帝國の瓦解とが示すあの悲劇の終幕に向つて、その歩をいそいでいたのであつた。

さて、ウエーバーは少年時代はベルリン郊外のシャルロッテンに廣い庭のある家を買つた父の許で過ごし、十八歳でギムナジウムを卒業したが教師にはその優れた頭腦を賞讃されたが性格的には不遜な、肉體的には瘦せた弱々しい撫で肩のこの腺病質の青年は、燃えるような知識欲をいだいて、ハイデルベルグ大學を訪れた。そののちベルリン、ゲッティンゲンの各大學に入り父の修めた法律學を中心に哲學、經濟學をも學んだそのうち一年間は、ストラスブルグにおいて兵役を果した。ことにハイデルベルグ時代にはこれまでの精神的關心に代つて、肉體的關心が前面にあらわれ荒々しい野性的な要求が青年の肉體を揺り動かし、學生生活に沈溺し、酒を飲み、第三學期には決闘までして切傷をうけたりなどしたが、しかしこのような生活のおかげで彼の肉體は見違えるほど強化され、一年間の兵役の義務も無事終えることができた。一八八四年秋軍務を終えて、ただちにベルリンの父母のもとにかえり、ベルリン大學に

通つた。さらに翌年、ゲッティンゲンにおいて國家司法試験の準備に精勵して、一八八六年五月國家司法試験に合格し、司法官試補 (Referendar) として勤務するかたわらベルリン大學で研究をつづけ一八八九年、*「中世商事會社の歴史」*という論文によつて學位を獲得し、一八九一年前年著わした*「ローマ農業史」*を講師就職論文としてベルリン大學講師となりローマ法、ドイツ法、商法を講義した。ついで一八九三年社會政策學會の委囑によつて、*「ドイツ東エルベ地方の農業労働者事情」*という不朽の名著を發表し、歴史學派の輝かしい後繼者として、學界に不動の地位を確立し、やがてベルリン大學助教授に拔擢され、商法及びドイツ法擔任を命ぜられたが彼の關心は、法律學よりも經濟學にうつりつあつた。この年の秋かねて婚約中のマリアンネ (Marianne Weber) と結婚している。さらに一八九四年フライブルク大學教授となり九七年ハイデルベルグ大學教授を歴任した。この間雜誌論文*「東エルベ農業労働者における諸動向」*、取引所のはなし<sup>々</sup>を發表し、大學就任講演としては、*「國民國家と國民經濟政策」*を試みその古代社會理論を<sup>々</sup>古代文化没落の社會的諸原因<sup>々</sup>に要約している。

ハイデルベルグ大學に就職中親しい同僚として、有名な宗教哲學者であつたエルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch) や公法學者ゲオルグ・エリネック (Georg Elinck) と交わり間もなく、少年時代からの友人であつた、哲學者であり、社會科學者であつたハインリッヒ・リッカート (Heinrich Rickert) もこの仲間に加わつた。この年の初夏父母の不和が激化し、彼は母に加擔したが、和解に達しない間に父は旅行中急死している。

しかし一八九九年より神經病をわずらい研究や講義不能となり一九〇二年遂に教職を去つた。それ以來ハイデルベルグに閑居して、教壇にたたず悠々自適のうちに思索や研究に没頭した。

一九〇四年雜誌 *「社會科學及社會政策アルヒーフ」* (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik) 改組にあたり、ゾンバルト (Werner Sombart) とともにその責任編集者となる。この年再出發の第一號卷頭に序ともた

社會科學方法論の文獻として有名な論文「社會科學的及社會政策的認識の客觀性」(Die Objektivität der sozialwissenschaftlicher und sozial politischer Erkenntnis)を發表した。同誌にまた同年「ロシアにおける世襲財産問題の農業統計及社會政策的考察」を發表し、間もなく彼の劃期的業績「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus)を發表しはじめた。この年の盛夏よりアメリカのセントルイスの「世界科學者會議」にまねかれて渡米し、他のドイツの學者のようにアメリカの物質文明を嫌惡の眼をもつてみることをせず翌年コンラッド年報に發表した論文、「最近十年間のドイツ文獻における古代ゲルマンの社會構成における論争」はこの學會の報告を論じたものである。

一九〇五年頃になると、彼の人格と學問とを信頼して、彼に教を求めるものが次第にその周圍に増加し、この年八月ロシアに革命が勃發し、マックス・ウエーバーもこれに深い關心を示し、ロシア語を短時日で修得し、ロシアの新聞によつてその経過をつぶさに觀察し翌年アルヒーフ(雜誌)にロシア革命に關する二論文を發表している。また有名な歴史學者エドワード・マイヤ(Edward Meyer)の歴史學的方法論を批判した論文「文化科學の論理學の領域における批判的研究」をアルヒーフに發表している。

さらに一九〇七年の夏、シュタムラー(Stammler)を批判した。「シュタムラーにおける唯物史觀の克服」という論文をアルヒーフに發表している。そしてさらに社會政策學會の仕事として、勞働者の社會心理學的調査を計畫しこれに着手して、この結果一九〇八年から九年にかけてのアルヒーフに二つの長大な論文を發表している。このころになると、彼の周圍に集る人々はいよいよ増え、さきあげたハイデルベルグの教授のみならず若い學者や藝術家その他の有名なジンメル(Georg Simmel)やゾンバルトやヤスパース(Karl Jaspers)などの人々が遠方から彼を訪れた。

コンラッドの「國家學辭典」(Handwörter buch der Staatswissenschaft)第三版のために一九〇八年「古代農

業史 (Agrar verhältnisse im Altertum) を完成し翌年『社會經濟學綱要 (Grundriss der Sozial ökonomik)』という叢書の編集を全責任をもつて引受けた。彼もこの叢書の一つとして、社會理論の體系的組織の展開である『經濟と社會 (Wirtschaft und Gesellschaft)』の執筆を受諾している。これにともなつて、彼の努力は、彼獨特の歴史、社會、理論の體系構成にいよいよ傾いていつたと考へるべきであらう。

ところが一九一四年七月第一次世界大戰が勃發した。一方では祖國のかくれた弱點を悉知し、他方では祖國愛にもえたウエーバーは、靜かに書齋で研究をつづけることが出來ず自ら軍役を志願して、ハイデルベルグ豫備野戰病院に勤務したが當時すでに戰局の前途多難を洞察しできるだけ早く和平すべきだと決意し、ベルリンにおいて、多くの人々の説得にとめたが絶えず保守的官僚や軍國主義者などと戦わねばならなかつた。しかしこの年の暮に除隊して、宗教社會學の仕事に没頭しアルヒーフ九月十一月號に『世界宗教の經濟倫理 (Die Wirtschaftsethik der Weltreligion)』の最初の部分を發表した。

このようにして前後五年間の戰爭中困難を犯して和平運動に奔走するかたわら研究をつづけ異常な努力をおこなつてきたが一九一九年和平問題の解決とともにブレントノー (Brentano) の後任として、ミュンヘン大學教授となつて再び學問的活動が始まつた。同年ミュンヘン大學學生のために試みた『職業としての學問 (Wissenschaft als Beruf)』『職業としての政治 (Politik als Beruf)』という講演は、久しい苦練をへた高い境地から彼の社會觀、歴史觀、人生觀を生々しくしかも秩序整然と語つておりその巨大な、歴史社會理論の彫琢を再開しつつあつたが、一九二〇年五月より『社會主義』『國家論』の講義をはじめるべき準備しそれに着手した直後即ち六月六日感冒のために發熱しついに肺炎となり六月十四日ミュンヘンの客舎で永眠した。

マックス・ウエーバーは生前は一冊の書物も刊行しなかつたが、彼が生前發表した論文は、大部分五組七卷の論文

集に収録されている。即ち、

「學問論文集一卷」(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre 1922)

「社會史」經濟史論文集一卷」(Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte 1924)

「社會學及社會政策論文集一卷」(Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik 1924)

「宗教社會學論文集三卷」(Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie 1920-1922)

「政治論文集一卷」(Gesammelte Politische Schriften 1921)

として公刊され、そのほかに遺稿であった。

「經濟と社會」(Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der Sozialökonomik 1921)

「經濟史」(Wirtschaftsgeschichte, Abriss der universalen Sozial und Wirtschaftsgeschichte 1923)

も彼の死後印刷にふせられ一般に公刊されている。さらに彼の最愛の夫人であり學問上のよき伴侶であったマリヤ  
ンネは一九二六年夫マックス・ウェーバーの詳細な傳記“Max Weber, Ein Lebensbild”をあらわしている。

## 第二章 マックス・ウェーバーの學問論

生前マックス・ウェーバーと親交深く、かつ彼の最もよき理解者の一人であつたカール・ヤスパース(Karl Jaspers)はマックス・ウェーバーの人間の印象をつぎのように描寫している。

マックス・ウェーバーの外観は矛盾に満ちていた。即ち大きな身振りをしながら人を魅するような言葉をもつて語る命令的な姿、そして、世間的にみれば殆んど隠された彼の生存の無名性優雅な彼の動作、濫かな彼の心、子供のよ  
うに卒直な純粹人間的な彼の關心、而してある瞬間においては神性を呪咀するまでに昂まつてくる眞實性の暗い峻嚴

あらゆる辛苦をも辭せざる底の知識欲としての熱情的研究、而して全ての取得に對する無關心、技術的研究の外觀的な表面性に於ける不斷の動き、而して存在の本來の眞理性への深き根差し、方法的知識の徹底性、而してあらゆる知られたる事の相對化、

他人の倫理的態度に失望した際の具體的瞬間における冷酷なる嫌惡、而して、果しない善良さ蒙つた不正に對する寛容

反對者に對する凡ゆる限度を破るような鬭争、而して勝利が彼に確實に見えた瞬間に於ける勇らしき和解の覺悟  
 來るべき不幸に對して、廿年が間なし續けた彼の洞察の興奮、而して一九一八年の破局に於ける全き不安  
 幸福なる現在を享受する能力、生存の高い明朗さ、而して測り知る可からざる破壊的いきどおり

日常の法則としての倫理的要求を實行する際の無條件性、而して、暗いデーモンに對する。明瞭ある解放性、云々  
 とのべているがマックス・ウエーバーの内面的生涯は絶えざる、主題の變更と音階の變調の連續であり全體として捉えがたい未完成のシンフォニーであつた。彼の傳記をみてもわかるように、彼は絶えず政治に關心をよせていたがドイツの政治にこれという重大な影響をあたえることもなく、また數多くの學問的勞作を残しているが、それらはすべて、断片的であり未完成のままのこされた。政治的行動と學問的反省は彼の世間的生涯を形づくる、二つの重要な主題であつたがそのいずれにおいてもその途中においてつまづいている。このような、断片的で未完成な人物が今日においても高く評價され、時には、二十世紀最大の社會科學者の一人に數えられているのは一體、いかなる意味においてであらうか。このような問題を中心にして、彼の思想を追求していくであらう。

まず社會科學者としてのマックス・ウエーバーを顧みるとわれわれはその思想のあまりに多面的でありかつ流動的

であることに気がつくと同時に當惑する。彼の思惟は絶えず一つの對象から他の對象へとうつりかわり新しい素材が次から次へと、認識の世界に持込まれる。例えば初期にはローマ農業史や東エルベ地方の農業労働者問題を取上げたかとおもうと、中世商會社史論や株式市場論が見い出され、社會科學に認識の客觀性を強調する倫理的方法論的研究が行われるかとおもうと、ロシア革命論や政治に對する多數の論文が發表されさらに「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」や中國、印度、ユダヤ教に關する宗教社會學的研究がすすめられるかと思うと工場労働の心理學的技術調査が行われ職業としての政治が語られるかと思うと、職業としての學問が取上げられている。

このように主題はめまぐるしく變化しそれに伴つて、多數多様の知識と資料が驅使される。哲學、經濟學、法律學などの概念や方法、及び西洋や東洋の幾千年間の歴史的事實の把握、自然科學的方法への配慮、實にこれらの種々雑多の對象と資料と方法がマックス・ウエーバーの社會科學的思惟をめぐつて、動いているのである。前にみたマックス・ウエーバーの全生涯と同様彼の社會科學的思惟もまた矛盾にみちた、ときには非合理的斷絶をふくむ諸斷片の不可思議な總體であることができる。

それでは一體社會科學者としてのマックス・ウエーバーは究極において何を求めていたのであろうか、この問題をさらに深く追求していかなければならない。マックス・ウエーバーの社會科學的思惟は最初彼の政治的實踐の場として、ドイツ國民國家を形成する理念の解明、即ち *Staatssinn* を主體的實踐的に把握しようとして展開された。このことは彼の初期の論文が明らかに示しているが、しかしこのような最初の主題はその展開過程の途中において、更に一つの新しい課題を導入するにいたつた。即ちドイツを一つの國民國家にまで形成する理法を追求していくとき、彼の社會科學的思惟はやがて、ドイツの經濟的後進性の問題に直面せざるを得なかつた。なるほど彼の當時のドイツは偉大な政治家ビスマルクによつて、先進資本主義國のイギリスやフランスとの競合によつてこれを打倒し追い越す強

力な政治の渦中であつたが、ここにみられた諸矛盾や近代資本主義生成の運命的な力は結局マックス・ウエーバーの社會科學者の精神の關心をいたくひきつけた。有名な「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」からはじまり中國、印度、さらに日本などのアジアの世界宗教や古代ユダヤ教の經濟生活に對する聯關の探究へとすすんだ彼の宗教社會學的研究の系列は、このような近代資本主義の本質とその運命を社會科學的に、認識せんとする努力のあとを示すものである。

とくに彼の關心はその後次第に社會科學の分野に集中され、理念型的把握による價值判斷から自由な、社會科學的方法的基礎づけとりわけ理解社會學の體系化が圖られた。他方その合理主義的相對主義にもとづく、制度的歴史社會學的勞作において、合理化という觀點から西歐近代社會の構造原理の解明に専念したのである。そのためには彼は自由主義的個人主義的なブルジョア社會學の最後の一人といわれているが、彼の學風は他の人々のように一派をなさないかわりに世界的な規模における影響を社會科學界一般に及ぼした。

つぎにマックス・ウエーバーの基く根本的立場を考へてみると、結局彼は、普遍化的法則定立的自然科學と個性化的記述的文化科學とを對置する。リッケルト (H. Rickert) を主としたドイツ西南學派の立場を繼承しそれを發展させ、生の現實をその特性において價值關係的に理解し、その歴史的存在根據を問う現實科學としての社會科學の建設に努力したが、その際因果歸屬の手段方法として、理念型 (Idealtypus) の概念を用いこれによつて無限に豊かな歴史的現實を測定し比較する方法をとつた。理念型とは、理想型ともいわれ、マックス・ウエーバーによると、これは一個のまたは若干の觀點の一面的高昇によりそしてこの一面的に高揚された觀點に合するところのここには多く、かしこには少く處によつては、全くないというように分散して存在する夥しい個々の現象をそれ自體において、統一された一つの思想像によつて、獲得されるもの即ち矛盾のない連關によつてまとめあげた思维的構成物であり一つのユ

イデオロギアにすぎないものではあるがしかし決して、存在すべきもの或は模範的なものという意味をもつものではなく、ただ、われわれの想像力によつて、充分理由づけられているものとして、即ち客觀的に可能だと見え、我々の法則定的知識に適確だとみえるような連關の思惟的構成物以外の何ものでもないものである。われわれはこのような思惟的構成物をもつことによつて、現實の個々の行爲や行爲連關がこの思想像の純粹性にどれだけ近いか、または遠いかを確定することが出來またそれらの志向する意味を純粹な形で取出し、更にこれを他の行爲及び、行爲連關のそれと比較することによつて、その意味を明確にすることが出来る。即ち、これらの理念型は經驗的現實の意味を素出的 (heuristic) に明瞭にしこれを理解しやすきようにするのである。例えばわれわれは「資本主義的經濟形態」の理念型に照合することによつて、種々様々の時代と國における經濟的行爲やその連關から成立する經濟社會が、どの程度まで概念上の意味において「資本主義的」であるということが出来るかをきめることができついでそこにどの程度まで「非資本主義的」モチーフがはたらいているかをたしかめることが可能でありこのようにして經驗的に與えられいろいろの經濟現象の意味を、素出的に理解することが出来るようになるのである。このようにみてくると結局マックス・ウェーバーの理念型は現實の行爲及び行爲連關をそのモチーフから即ちその有意味の根據から理解するための概念的用具であるといふことができる。

したがつてこのように矛盾なく整合的に構成された理念型が用いられるならば一方では理解型と現實とのずれは、偏倚として理解され、客觀的可能的判斷と適合的因果歸屬を介して現實を思惟的に整序する。經驗科學が可能となると同時に、他方では個人的な信念や世界觀などの價值判斷的要素を社會學的認識から除去することができる。ここに理念型的構成と價值判斷排除との不可分の關係がなりたつてくる。

マックス・ウェーバーが講壇社會主義者を批判して、世界觀問題に對して講壇で價值判斷を下すべきでなく、知

的廉直が必要であるとし實踐のために處方箋を書くことが經濟科學の任務でないと強調したのは、上述のような彼の研究態度から由來しているものと云える。

### 第三章 マックス・ウエーバーの宗教論

第一章でみたごとく、マックス・ウエーバーが一八八三年秋から翌年秋にかけて、軍隊生活をおくつたストラスブルク時代は、彼の内面的成長の上にのみのがすことのできない影響を残した。それはとりもなおさず母方の叔母、イダを中心とする、バウムガルテン一家との精神的交遊であつた。既述のごとく、マックス・ウエーバーの母方の家系には、極めて熱烈な宗教的内面的な性格が傳わつておりとくに倫理的嚴格主義といつてよい程のプロテスタント的心情倫理が支配的であつた。そのうちでも母の姉イダの心情は深刻であり軍隊生活という精神的砂漠のまつただ中であつた當時のマックス・ウエーバーにとつては、この叔母イダを中心とするバウムガルテン一家との交わりは唯一の心のオアシスであつただけに、そこから受けた精神的影響は彼の心の奥底の本質にふれるものがあつた。更に彼はイダーの指示によつてチャイニング (William Ellery Channing 1780-1842) の著作に親しんだ。チャイニングは十九世紀の前半にアメリカ東部の牧師であつた。教義に囚われない自由な信仰をもち、自由な魂の結合をもつて社會生活の最高原理であると説いていた。そのために奴隷解放や禁酒運動を熱心にすすめた人であり、その立場はかなり素朴で單純なものともいえるがそれだけに人間の心的生活の現實に根をおろし全く無縁の人々にも理解され訴えられやすかつた。従つて、マックス・ウエーバーも、私が物心がついてからというもの、宗教的なるものが私にとつて單なる客觀的興味以上のものとなつたのはこれが始めてである」とチャイニングの影響を語つている。

このようにストラスブルグ時代のマックス・ウエーバーは、バウムガルテン一家、ことに伯母イダの宗教的感化を深

くうけたのであるが、しかしこの一家を強く支配していた倫理的リゴリズム的雰圍氣に對して一種の反感をいだいていたようであり、彼は父と同様一切の人間行爲を倫理的規準にあてはめ絶對者の至上命令でこれをはかることに大きな疑問をもつていた。即ち彼は、私はバウムガルテン一家を支配していた或種の根本的な物の考え方に對して、意識的なしつかりした反對の態度をとつた。この態度は、私が全く別の人間にでもならない限り放棄することのできないものである。バウムガルテンの家では人間はそのあるがままの姿においてではなく、如何にあるべきかという觀點から取扱われると語つてゐる。

このような相反する内面的な二つの原理がマックス・ウエーバーの心中で葛藤してゐたようであり、即ち一方ではキリスト教的倫理とこれのみでは割り切れない超個人的社會的なるものへの現實感が目覺めていたのである。彼にとつては、福音書的な個人人格の完成と同様超個人的現世的な文化の實現もまた或意味では倫理的至上命令であつた。そして國民的國家權力こそはこの超個人的現世的文化實現のための不可缺の奉仕者であると考えてゐる。

このようにして、キリスト教的信仰に根ざす個人人格の内面的要求を歴史的理念的文化的客觀的過程のなかにいかに生かしていくかということがマックス・ウエーバーの一生涯の倫理的議題とさへなつた。

ことに父マックス・ウエーバーからうけつがれた政治への關心につよく彼をとらえ、それは情熱的にまでたかまひドイツ國民國家の發展に向けられていたが、ドイツに負わされた運命は、政治的没落への道であつた。一時はビスマルクの偉業によつて、一時は國民的權力國家として世界史の榮光をあびるかにみえたがすでにこのときにマックス・ウエーバーはドイツ國民國家の基底を押し流そうとしていた資本主義の運命的な流れを注視してゐた。このようにして彼の學問的關心の中心には近代的人間の生活を規定する最も運命的な力即ち資本主義 (Kapitalismus) が定つていたのである。彼の名を不朽ならしめた。プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神にならびにそれに續く、世

「宗教の經濟倫理」はこの關心の具體的な克明である。

まずマックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のなかにおいて問題としたのは今日一つの巨大な秩序として各人がそのなかに入り込み、各人にとつて少くとも個人としては如何ともなし難い外枠としてあたえられている資本主義經濟組織 (Kapitalistische Wirtschaftsordnung) は、そもそも、人間のいかなる生活態度を構成要素として成立したか、ということであつた。彼はこの生活態度を倫理的に性格づけるものとして、特異の職業觀念、即ち合法的利潤を職業 (Beruf) として組織的合理的に追求する心情をあげその由來を十六・七世紀のプロテスタンティズム、就中カルヴィニズムの禁欲的合理主義に求めたのである。

元來カルヴィン (Jean Calvin 1509-1563) の禁欲的合理主義もそのもとづゝところは、清教主義 (Puritanism) でありこれが彼の宗教思想の根幹をなしている。彼は神の絶対の意味を重んじ人間の救済も全く自由に神の豫定の中に入り人間は無力でただ神の榮光を讚美すべきものであるときいわゆる二重豫定説をとつてゐる。

この場合神は被造物と對象的に考えられる。地上にあるもの、此世的なるもの一切が神の創造にそくする。即ち神は世界の上に立つ人格的創造神 (Überweltlicher persönlich Schöpfer gott) であるしたがつて、神は被造物の一切の運命を絶対的に完全に獨裁する。このようにして神と被造物としての人間との間には、絶対に越えることの出来ない深淵がある。それゆゑ、また神が獨裁者としてそれぞれの被造物に此世及び來世においていかなる運命を與えるか、ということも人知のおよぶところでない。この意味で神は隠れたる神である。

しかもこの神は正義の神であり人々が、道德的に正しい生活をおくるときに始めて、神は來世の救済を與えると考えられる。とくにイスラエルの預言者達 (Propheten) は街々にみちみちている不正に對する憤激からこの正義の至上命令にいよいよ激しさを加えて行つた。そして、この神觀が、キリスト教にうけつがれると救済されるためには人々

はその生活を徹底的に合理化しなければならぬことを嚴命する。さらに慈愛の神とともにこの正義の神は、その後長い間キリスト教の歴史を支配しつづけた。しかしカルヴィンの宗教思想においては、この舊約的な正義の神が慈愛の神よりも壓倒的に重要な役割を果している。

元來宗教改革 (Reformation) は原罪意識の再強化によつて特色づけられていることは周知の事實である。ここに罪惡感とのほげしい鬭争が生れる。もしこの鬭争において人々が救済と恩寵との喜びに到達し得たとしてもそれがほげしい罪惡意識にもとづくかぎりその勝利は自力にもとづくものとは考えられない。それは神の寵物として、受取られるであろう。ここに「救済は神が天地創造の昔より豫定せるところである」との豫定説 (Prädestinationslehre) が生れてくる。とくにカルヴィンはルターやルター派とくらべてこの豫定説を徹底的に追求した。即ちカルヴィンの二重豫定説といわれるものであり、またこの意味から神が萬物や人間を造つたのもまた人々を救済と滅亡とに選別しその運命を司るのもすべて神の榮光をますためであり、したがつて人間のために神があるのでなく、神のために人間があるのである。結局、人間は神の榮光をますために神の力の道具として獻身しなければならないのである。

しかし兎に角人々は罪惡になやみ救済を渴望する。そして恩寵の獲得に狂奔する。しかるにカルヴィン派の清教徒にとつては、神も聖典も教會も牧師も一切が役に立たない。そこにはいささかの懈怠も許されない。懈怠はただちに千仞の奈落への途である。深刻な原罪意識が導いたものは少しの油斷も許さない激しい緊張である。清教徒はこの感情から逃れるために選んだ途はルター派が謙遜自卑を敬虔な信徒のもつとも重要な特性の一つとしたのに對してまさしくこの緊張に直面してかえつて、これを絶え間ない組織的な人生の闘いとして生きることであつた。

そして清教徒は、此世に處して、一生涯正しく勤勉に生きようとした。そのことのみが神の榮光ます唯一の手段であつた。彼等は修道院の外にありながらしかも終生修道僧として生きなければならない。彼等清教徒は人里はなれ

た修道院においてでなく、忙がしく日常の義務にたずさわりながらしかも良心的にかつ規律正しく生きようとしたのである。要するに彼等は禁欲的であつたがその禁欲は、出世間的な此世をのがれる。(ausser weltlich) というのでなく、此世の内において (inner weltlich) においてであつた。清教徒の全生活神経はこの内此世的禁欲 (inner weltliche Askese worldly ascetism) の一點をめぐりて、終始緊張しつづけたのである。即ちあくまでも此世をすてずそれから逃避せずしかも彼が生き甲斐と信ずるもの、即ち神のために一生懸命たかつていつたのである。

そしてつぎにカルヴィンの二重豫定説からついで個人主義が生れてきた。即ち神とのもつとも深い交渉はただ孤獨なる魂の祕密のうちに見出されるといふ二重豫定説は、必然的に精神の孤立化を生みだしてくる。ここでは個人の魂が一切の媒介なしに一人の孤獨な神と對決する。自分が個人としての自分が救済されるかどうかの宗教的貴族主義ともいふべき個人主義が生れてくる。そしてここでは、神と人間との間には親子のごときあたたかい感情のはたらく、有情者の關係があるのでなく、神は完全に没主觀的な感情を交えざる極めて冷酷な關係があらわれてくる。そしてこの態度がまた社會や隣人にも及ぼされ、そこにも合理的な没主觀性が強く働いた。

とにかく清教徒は有情者の主觀主義的感情よりも客觀的な感情を重んじ人々のこの世における限られた人生は、神の榮光をますためにあるのであると信じていたのである。

このような没主觀的な合理的な感情はさらに、被造物崇拜を嫌惡し、人間關係においても有情者の感情的なるものを、極小化しようとしたがつて、權威の神聖視カリスマに立脚し、有情者の感情的人間關係の基礎にもとづく前近代的なるものを排除するようになる。

以上のような宗教信仰にもとづいて、清教徒は、職業労働を尊重した。しかもそれは諸個人が傳統によつて、はめこまれた職業をそのまま素直にうけとりそれをそのまま踏襲して勉勵するといふのでなく、職業は傳統と權威をはな

れて神の意志にかなうように選擇されなければならないと考へている。しかもそれは道德的であり一般の福祉に貢獻しさらに利益のあるものでなければならぬ。

マックス・ウエーバーをして、世界史上空前のものと呼ばしめた、このプロテスタント諸派とくに清教徒の實踐におけるきわめて眞摯な徹底的な態度、即ち此世的な禁欲とよい意味での個人主義と近代的合理主義は、本來反營利的であるべきにかかわらず反面において生産力の著しい擴張とその資本の蓄積を呼びおこした。そしてその擔い手たちを富裕にし思わざる結果として新しい形でより強力な營利心を芽生えさせ、成長させることとなつた。そしてこの過程が進行すると、こんどは宗教的なヴェールをかなぐりすてて新しい營利心と内面的に深く結びつくようになつた。これがいわゆる資本主義の精神に他ならないとマックス・ウエーバーは考へている。ともかくプロテスタンティズムの倫理の擔い手であつた新教徒とくに清教徒は客觀的には、全く考へもしなかつた結果としての資本主義の精神を生みおとすこととなつたのである。

#### 第四章 マックス・ウエーバーのアジヤ宗教觀

ここではマックス・ウエーバーはまず西洋と東洋との神祇觀の相違についてのべている。西洋の宗教はいうまでもなく、キリスト教である。その神はイスラエルの一地方神から出發しながら豫言者達の努力によつて普遍的になつたヤハヴェである。この神はイスラエルの傳統をうけて、世界の創造者であり全知全能の力をもつて、被造物を支配し管理する正義の神であり、それ故に世界支配的人格の倫理的な創造神である。

ところが、一方アジヤの宗教のうちにも超感覺的でありしかも世界の秩序を保持する神の存在も少くなかつたが、しかし多くの場合には、例えば中國の「道」インドのヴェーダの理法 (rita) や法 (dharma) のように神の出現する

前にすでに宇宙や世界の永遠の秩序が存在していた。しかもこの攝理は神の存在の上に位し、西洋の神のように世界を創造しそれを管理するのではなくこの永劫不變の攝理にしたがつて、世界を運営していくものであつた。そのために、歴史に働きかけ、積極的に世界に働きかける必要はなかつたのである。したがつてここでは、世界の出來事を攝理としてよりも運命として受取りやすい傾向があらわれてくる。

このような西洋と東洋との神觀の相違はつきつぎに新しい結果を生み出してくる。例えばマックス・ウェーバーは西洋においては早い時期に呪術を克服した (*Entzauberung*) のに對して、東洋では長い間呪術の克服は不徹底におわり時には呪術への屈服がおこなわれていたことを指摘している。同時にそれにともなつて社會の停滞があらわれている。その理由として彼は、宗教信仰の支持者層の相違に焦點を向けている。

西洋の宗教とくにキリスト教の内部ではその信奉者や支持者が大體において庶民・大衆であつたのに對して、東洋ではつねに特權者に屬する貴族的知識人が宗教や神の信奉者として前面にあらわれている。

このことは中國の場合とくに顯著である。中國での支配的な社會倫理即ち儒教によると、現世即ち此世はあらゆる世界のうちで最高最善のものであり人間のその性は本來善なるものでありそれ故人間はすべて、それ自身倫理的に自己を完成する能力をもっていると考えられる。そしてこの自己完成のためには、古典や聖人君子の言行を身につけるべきであり、このような教養の缺如とその原因としての貧困は、不徳であり惡であつた。そして現世即ち此世を否定することなく、これを肯定しこれに順應しこれと均衡して生きて行くことが望まれ、これを破壊し動搖させるような言動は極力阻止された。そこで倫理的行爲の報酬として人々が期待したものは宗教的救済でなく、不老長壽、健康富裕などの現世のものであり社會に期待したものは名聲であつた。したがつてこのような樂天主義的人間觀のなかには一滴の原罪意識も介在せず罪惡は傳統的權威に對してあるだけで心のうちなる良心に對してあるのではなく個々の

行爲は「禮」の均齊ある體系にしたがつて、此世現世に順應せしめられたにすぎず内面的に倫理化しようとする努力は殆んど試みられなかつた。

しかも中國での宗教信仰の支持者は、マックス・ウェーバーによると古典的教養をもち科擧の試験に合格して、官祿をはじめ、役得によつて巨富をたくわえて文人的生活を享受する。讀書人としてのいわゆる士大夫であつた。

このように官僚としての特權層に屬する知識人が指導的地位に立つと人間觀や社會倫理の上に大きな影響を及ぼしてくる。まず特權層として此世現世の幸福を享受する。官僚は來世を考えない。官僚的冷淡さをもつた彼等の合理主義は、外合理的情緒や宗教を蔑視し天帝の加護や永遠の秩序にしたがつて、世界が平穩に運営されること、がその最大の倫理的思想でありいわゆる修身齊家治國平天下がその最大の關心事であつた。このような官僚型の功利主義をもつとも洗練した形において示す儒教倫理をマックス・ウェーバープロテスタントとくにピユリタリズムにみられる資本主義の精神と對照的領主的支配の精神 (*Geist der patrimonialen Verwaltung*) と呼んでゐる。

このようにして、中國の大衆の日常生活は自然の性情と傳統との拘束するままに放置され、しかも、その傳統主義 (*traditionism*) とその根底となつてゐる呪術とはかえつてその支配力をいよいよつよめていつた。中國は絢爛無比の古代文化をきびきび老大な人口を擁し巨大な富を蓄積したに拘らず同時に最も典型的な停滯的な社會であつた。呪術は一時的には知性の不安をしづめ行動への勇氣をあたえる場合もある。しかし一方では呪術は進歩のための苦しい努力から社會を逃避させる働きをする。社會自體もまたこの怠惰な産物に中毒した。假りに進歩を欲しても前進するためには異常な困難をとまなわずして不可能である。しかるに中國の特權階層はこの停滯性をその搾取機關に利用したのであつた。

しかし印度ではこの中國の不徹底な宗教生活にくらべて激しい執拗さをもつて解脱のための苦行と瞑想が行われて

いた。しかしこのような烈しい宗教的欲求にかかわらず印度でもまた中國と同様呪術への屈服が生じた。その理由はなぜであらうか。

印度の宗教においても指導的地位を求めたものは特權的知識人であつた。しかし印度では中國とことなり太古より四姓をはじめとするカースト制度が發展した。しかも祭司呪術者は最初から、王侯貴族と獨立の勢力を形成して、宗教を主導したところにその宗教思想が中國と全く異なる道をすすんだ根本的原因の一つがあつた。

とくにブラーフマンによつて樹立された宗教思想がヴェータからウパニシャッドにすすむにつれていわゆる輪廻と業の教説が發展した。即ちわれわれの靈魂は前世から現世をへて來世に轉變するものであり因果應報として現世の運命はすべて前世の行爲によつて完全に決定されており來世の運命はすべて現世の行爲によつて完全に決定されている。このような原理をブラーフマンは一切のものに貫徹したことである。このような思想が印度の支配的宗教である。インド教の核心として、カースト制度と相俟つて、長く印度の民衆の魂をその奥底から支配しつづけて來た。したがつて一般の庶民は不滿にたえない現世の不合理も前世の業にもとづくものとして諦觀しうるともに一方では來世のよき生活のために美しい生活を求めて、カースト規律によるこんで従つたのであつた。

このようにして、印度の宗教も當然また救濟の道を現世からの逃避と思索とに求めるようになりいわゆる遁世的冥想によつて輪廻の世界を解脱して、涅槃 (Nirvana) に入ろうとしたのである。勿論このような悟りに達する方法として苦行は言語に絶して徹底せられ、したがつて禁欲は無比の發展をした。しかしこの禁欲は現世への働きかけがなく、つねに現世からの逃避であつた。このような徹底的苦行と思索は人類最高の事業の一つではあり、そこから、偉大な宗教家が多數輩出したにかかわらずそれは一部の特權階層の仕事にとどまり一般庶民は全く別の世界に生きつづけていたのである。一部の神秘的體驗は、宗教化して、さまざまの祕儀をつかさどる祭司を生みだすようになる。

そして、祭司と大衆との間には、現世的世俗の利益をめぐる取引の關係にかわりその祕儀が大衆化するとともにそこに呪術への迎合があらわれる。そしてここでは、大衆の行動は戒律によつて、個別的に拘束されるのみであり、その行動の背後にあつて、それを統一し主宰する倫理的人格の存在は求められず單なる儀禮への背反のみが罪惡意識をよびおこすのみで内面的な原罪に對する思想や良心は、極めて稀薄であつた。

このようにして、中國と印度を主とする東洋においては宗教は結局呪術を完全に克服することはできず呪術に對する敗北はあきらかであつた。結局西洋のプロテスタンティズムとくにピューリタリズム（清教主義）がなしたような呪術の劃期的徹底的克服を遂行することが出来なかつたのである。

## あとがき

マックス・ウェーバーは、自由主義的個人主義的なブルジョア社會科學者の最後の代表者であるといわれているが、彼の業績や所説は斷片的でありそれだけにその學風は一派をなさないので世界的な規模の影響を及ぼし社會諸科學の發展に偉大な貢獻をした。戦前は勿論戦後においてはとくにマルクシズム理論に對決する唯一の理論としてしばしば取上げられて來たし、我が國においてもこの方面のマックス・ウェーバー研究ははなはだ多い。

いまわれわれが足をふみ入れている世界、群衆集積と群衆支配の時代、すべてを利用化する時代、無氣力な苦惱と平俗な幸福の時代においては各人が一人一人哲學的に自己の眞理を求めることが再び課題となる。如何なる客觀性も個人的眞理を教えないであらう。ただマックス・ウェーバーの如き一個の人間に啓示された祕密に呼びかけられて、はじめて人々はその心を燃え上らせるであらう。そのときはじめて人々は蹉跌と死を把握した彼に一歩近づいたということが出来る」と現代の偉大な哲學者ヤスパースはのべているが、この言葉は、第二次大戰の嵐の後の今日に

もそのままあてはまる。西洋は勿論、東洋、とくに我が國においては、文化的混亂ことにその重要な一翼をになう宗教的混亂の問題を解決するため極めて有力な示唆を與えるであらうと確信して敢えて、彼の宗教論に焦點をあてながらこの小文を草した次第である。またこのような斷片的小論ではその奥深い理論の全貌をとらえることは不可能である。いづれ他日を期して、その責を果たし度いと念願して筆をおく。

最後にこの小論は先人のマックス・ウエーバー研究の文獻を参照しつつ、主として彼の宗教社會學論集によつた次第である。尙マックス・ウエーバー研究參考書を知り度い人は、戸田武雄著「マックス・ウエーバーの生涯と學說」有斐閣昭和二五年の最後に彼の著作目録とともに内外のマックス・ウエーバーの研究參考文獻を懇切丁寧に記してあることを附記する。

以上